

道を探す人（跋に代える） 徐玉諾君に贈る

わたしは道を探す人である。わたしは日々歩きながら道を探すが、終にまだこの道の行方が分からない。

今ようやく知った。悲哀の中で抗っているのがまさに自然の道だと。これはすべての生物との共同の道であるが、わたしたちだけがそれを意識している。

道の終点は死である、わたしたちは抗いつつそこへ行くのだ。つまりそこへ行き着くまで抗い続けざるをえない。

わたしはかつて西四牌楼で一台の自動車が強盗を載せて天橋へ処刑にゆくのを見た。わたしは思った、これはあまりに残酷だ、なぜ例の通り無蓋車に載せて送らないのか。なぜゆっくりと沿道の景色を見せ、人々の談論を聞かせ、行くべき道をゆき、それから行くべき地点に到着しないで、一陣の風のように彼を送って行くのか、これでは本当にあまりに残酷ではないか、と。

わたしたちは誰もが無蓋車に乗って行くのではないか。あるものは天国へ行くものと思い、歌い笑っている。あるものは地獄に落ちるものと思い、悲しみ泣いている。あるものは酔っ払ったり、眠ったりしている。わたしたちは——ただゆっくりと進み、沿道の景色を見、人々の議論を聞き、できるだけこれら得るべき苦しみと楽しみを享受したいと思う。道筋の如何については、西四牌楼から南に行こうが、東単牌楼から北に行こうが、なんの関係があろう。

玉諾は悲哀に深く親しんだ人である。今回彼の村塞は匪賊に攻め落とされ、彼の父だけが外にいて、他の人はみな消息がない。彼は言った、今は涙も出ない、と。——君ももう君の道を尋ね当てたろう。

彼の微笑んだような顔が、最もわたしの記憶にある。それはほんとうに永遠の旅人の表情だ。わたしたちは最大の楽道家であるはずである。これ以上のどんな悲観も失望もないのだから。

一九二三年七月三十日。

※初出：1923年8月1日『晨报・文學旬刊』